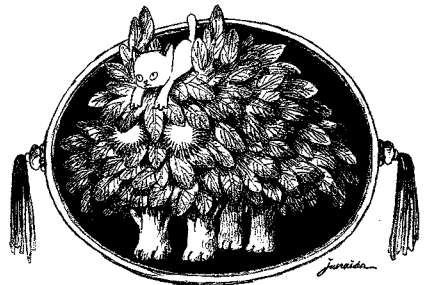


朝日 歌壇 俳壇



＜日曜日のプロローグ 06＞ junaida

短歌時評 生を反転させる言葉

山崎 聡子

今年四十八歳で亡くなった歌人・永井陽子の没後二十五年にあたる。ひまはりのアンダルシアはとほけれどとほけれどアンダルシアのひまはり音楽的な韻律と物語性を湛えた作風で愛読されてきた永井の歌だが、近年では歌集の入手が困難となっていた。今年に入り、文庫版「永井陽子歌集」が、『J』(石川美南編)が発行されたことはファンにとって朗報といえるだろう。四月、大宮図書館での企画展と併せて、永井の同人誌仲間であった詩人の大西美千代と、歌人の江戸雪による講演が行われた。大西の口から語られるエピソードは永井の歌人としての原点を知る手がかりになるものだったが、個人的には江戸が永井の後継世代への影響について言及したことが印象に残っている。永井は「モーツァルトの電話帳」にて、短歌を五十首順に並べかえて構成するなど、いわゆる「私性」(短歌のなかには表れる作者の素人生)との距離に意識的な作家だった。そして、江戸が指摘したように、「表現と人生を切り分けた」という意識が高まるなか、素人生と短歌表現の距離をどこに定めるかはますます切実な問題として問われている。ツルのうたツルのかたへに歌ひたしこの世を築てゆくもののため死にゆく親を詠んだ歌でも、「私」から距離をとることで、普遍的な人間の哀しみ立ち上る。永井の歌が同時代性をもち読み継がれる背景には、ときに苦しみを伴う「私の生」を言葉によつて反転させる力を見るからであり、歌集復刊は時代の要請ともいえるだろう。(歌)

高山れおな句集「百題稽古」 第5句集。300句を収録。歌人2人の解説や架空の著者インタビュー「霧中問答」などを収めた付録。『鏡花幻稿紅玉と薫風』『短歌は愚痴俳句は馬鹿や』『燃ゆるゆ』(現代短歌社・3300円) 第16回田中裕明賞 ふらんす堂主催。東京都文京区の藤井あかりさん(45)の句集「メゾティント」(ふらんす堂)に決まった。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合もあります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

●佐佐木幸綱選

牧場の牛の爪切り依頼せし獣医ベットの山羊連れて来る (沼津市) 石川 義倫
マンシヨンの敷地に深夜響く歌 宴会帰りの夫の声だ (奈良市) 小山寿美代
片時も離さなかつたぬいぐるみ入学の目にそと置かれる (朝霞市) 小峰 拓朗
カセットの交換に似てマンシヨンの隣の家族が入れ代わりたり (つくば市) 藤原 福雄
日本の戦史を死者に語らせる遊就館を訪えは疲れる (東京都) 野上 卓
起きぬけに香水一振り髪を替える (柏市) 伊藤 智紗
三月ほどツバメに宿を貸しており掃除蛇除け家主の仕事 (金沢市) 伊東 平隆
高校生入試失敗しました音沙汰ない生徒からやつと届いたメール (岡崎市) 戸田 陽子
妹は「星に願いを」弾きながら週末の夜の扉を開める (富山市) 松田 梨子
深い息で北条民雄を眺み終えるトランプとランプと騒がしい世に (浦安市) 中井 周防

【評】第一首、ベットの山羊をつれてやってくる獣医さん。彼(だろう)の人物が伝わってくる。第二首、上句、明快でうまい。たぶん週に一、二回は聞こえるのだろう。第三首、何年ものあいだ、いつでも抱いていたぬいぐるみだろう。

●高野公彦選

かの日には五十人学級五組ありき今新入生十人の母校 (秋田市) 高橋 りか
賑わみの歌友などなき身なれども新聞歌壇に親しき名の増す (加東市) 藤原 明
母は言う「歳を感じる」そんな母を姉といろんな所へ誘う (富山市) 松田 わこ
「日本人って戦争好きだ。敗けるまでは一年表開けて孫が眩く (船橋市) 清水 渡
荒れ狂う親父を逃れ駆け込みし隣家はこども頃のシェルター (中央市) 前田 良一
減反でそもそも米が無いのだと薄々気づく五キロ五千人 (相模原市) 石井 裕乃
看板の「アメリカ第一」内心は今の自分さえよければいいさ (東京都) 北條 忠政
辛口の日本酒が好き冷やが大好き淡麗が好き切子のおちよこ (新潟市) 太田千鶴子
鶏にも序列あるらし干潟なる大魚食むもの遠巻きのもの (下関市) 内田 恒生
樹木葬望む妹と下見する方三十三センチの終の棲家を (羽咋市) 北野みや子

【評】1首目、少子化を嘆く歌。昭和のころ、小中学校は一学年に五十人学級が五組もあった。2首目、田舎住まいで歌友もいないが、新聞歌壇で名前を覚え、日本各地に知人がいるような嬉しさ。3首目、優しい姉妹がいて、お母さん幸せ。

●永田和宏選

かたくりのうすむらさきに揺れる野に光ながれてみちのくは春 (仙台市) 沼沢 修
行てきますなんて言っちゃっていつの間にかメダカは家族になったのかしら (津市) 亀井百合子
「受け取って貰えませんか」と花屋さん「間違いですよ」と妻は言うらし (東京都) 海老根 清
A点から反対向きに歩きたす旅人算の続きを讀みた (奈良市) 山添 聡介
シベリアの父待つ母の舞鶴は地名と知りし五歳の記憶 (さいたま市) 斎藤 宏遠
早く早く妻を君子を弘一を返せ返せよ返せよ海よ (いわき市) 馬目 弘平
この国の立ち位置を知る親指を立てる大臣の赤き帽子に (観音寺市) 篠原 俊則
オオタニがトランプと握手すオオタニがしたかったとは思いたくない (水戸市) 中原千絵子
何度目の誕生日でも「ヒトラーと同じ日」なのだ四月二十日は (近江八幡市) 寺下 吉則
馬場さんの話聞いたらすぐ歌が出来そうで出来ない帰りの電車 (東京都) 友部美奈子

【評】沼沢さん、いい自然詠に出会えると嬉しくなる。かたくりの紫に流れる野の光。待ち望んでいた春だ。亀井さん、メダカに声をかけて家を出る。帰る時もただいまなんて言うのだろう。海老根さん、笑ってしまう。せつなく送ったのにね。

●川野里子選

ガザの子と目が合い涙みちくれば表面張力でしばし耐える (アメリカ) 大竹幾久子
遠くより来て遅れ著く消防車大事ならねば静かに帰る (多摩市) 豊間根則道
まな板をはみ出すほどの春キャベツなだめるように刻む千切り (松山市) 矢野 絹代
どの店も金魚の鉢おく町おこし仏具店では座布団敷いて (大和郡山市) 四方 護
防空壕へ逃げ込む前に子ら集め「こぎれいな服」に着せかえた母 (松戸市) 猪野 富子
鏡に映りイルカも自分だと分かるらしい私 (相模原市) 岡田真理子
食品のみな値を上げる春なればドーナツの穴の大きくなりぬ (さいたま市) 松田 典子
鳩だつて口づけ迫る時もあるだけとあんなに硬い同士で (川口市) 兼子 哲正
抱くこと交番ランプに羽ひろげ燕は泥を塗りはじめたり (稲沢市) 伊藤 京子
わが生家ストリートビューにまだ残る 亡き父母暮らしの姿のままに (愛知県) 松崎 孝則

【評】一首目、簡単に泣いてはならない。画像の向こうの子の苦しみを思えば。五首目、〈こぎれいな服〉は万が一を思う母の覚悟だろう。六首目、これは本当に自分？人間だからこそ自分を見失うこともある。八首目、嘴での口づけは難しそう。